偶像の世界でクリスチャンとして生きる

２０１１年5月
西九州伝道所
佐々木正明

（聖書をお持ちの方は、まず、以下の部分をお読みになって、聖書に書かれていることをお知りになってから、私の文をお読みくださると、理解しやすくなると思います）

旧約聖書の列王記第二、５章：１節～１９節、ヨナ書１章：１節～１７節、ダニエル書６章：１節～２８節、３章：Ｉ節～30 節

本物のクリスチャンたちは、偶像礼拝を徹底的に嫌います。それがこうじて、自分たちの宗教以外はみな敵とみなして、嫌悪感を抱き、憎み、蔑み、悪口を言ってしまいます。これは聖書を間違って読んだ、西欧キリスト教の残滓です。クリスチャンたちは絶対に偶像礼拝をしません。それは正しいことであり、聖書の教えです。しかし、キリスト教以外のあらゆる宗教を、敵視したり侮蔑したりするのとは意味が違います。

キリスト教以外のすべての宗教を悪者扱いするのは、キリスト教の独りよがりです。聖書もそのようなことは教えていないのです。多くの宗教の中には、非常に良心的であり、高度な倫理を持ち、聖書が教える人間としてのあり方や、神を礼拝する姿に非常に近いことを教えるものもあります。それらの素晴らしいところを、私たちは積極的に認め、正しく評価することが大切です。

それでいながら私たちは、ただキリストだけを救い主として信頼し、天地創造の神だけを、私たちのお仕えする方として大切にするのです。わたしたちの主張は、すべての宗教が間違っているということではなく、人を救うことができるのは、キリストだけだ、私たちが礼拝すべき方は、天地の創造者だけだということなのです。それは私たちが、イスラエルの民と同じように、自分の体験と聖書の教えを通して、天地創造の神を知ったからです。大切なことは、天地創造の神を知らない人々の宗教の、悪口を言うことではなく、天地創造の神を教えてあげることなのです

偶像の世界で唯一の神を礼拝して生きる生き方を、聖書に記されている三人の人物を通して学びましょう。

Ⅰ．　ナアマン将軍

ナアマン将軍は、シリアでは王様に次ぐ権力者でした。異邦人である彼は、当然、天地創造の神を知らず、王様と共に、彼らの神であるリモンを礼拝していました。ところが自分の病気と、捕虜としてイスラエルから連れてきていた少女の言葉を通して、イスラエルの神の力を体験することができました。彼のらい病が、神の人エリシャの仲介を通して癒されたのです。（日本語に適当な言葉が無いため「らい病」と訳されていますが、現代のらい病も含む、広い意味での皮膚病のことです）　そこでナアマンは、この神だけを自分の神として礼拝すると決心して、誓いをたてました。

ところが、彼にはどうしても破ることができないしきたりがありました。彼が帰国すると、いつものように、王と共にリモンの神殿に出向いて、彼らの神であったリモンを礼拝しなければならなかったのです。多分、王と将軍が共にリモンを礼拝するというのは、国家的行事であり、二人の絆を現すだけではなく、国家の一体感を表明するようなものだったのかも知れません。

そこで彼は神の人に言いました。「主が、次のことをしもべにお許しくださいますように。私の主君がリモンの神殿に入って、そこで拝む場合、私の腕に寄りかかります。それで私もリモンの神殿で身をかがめます。私がリモンの神殿で身をかがめるとき、どうか、主がこのことをしもべに許してくださいますように」　それに対して、非常に厳しいことでよく知られているエリシャが言いました。「安心していきなさい」

この物語は、異邦人の中、偶像礼拝を習慣としている人々の世界で、天地創造の神を信じるようになった人が、とりあえずどのように生きたらよいのか、ひとつのあり方を教えています。自分が天地創造の神だけを礼拝するということと、異教の神々を礼拝する人々の中で生きるという葛藤を、どう解決したらいいのか。対決姿勢だけが絶対に正しいのではないことが分かります。

Ⅱ．　ヨナ

ヨナほど愛国的で、偶像礼拝を嫌っていた人物も少なかったと思われます。彼は、アッシリヤの首都ニネベに対して、滅亡のメッセージを語るようにと、神の使命を与えられたのに、「嫌だ」と言って逃亡をはかったのです。彼が嫌だったのは、神が憐れみ深い方であり、ヨナのメッセージを聞いたニネベの人々が悔い改めたならば、神は彼らをお許しになるに違いないと、初めから察知していたためでした。彼は偶像礼拝者であり、イスラエルの敵であったアッシリヤの人々を、心の底から憎んでいたのです。

彼は、逃亡中の船の中で嵐にあったとき、異邦人たちが嵐を恐れて、それぞれの神に助けを求めて泣き叫ぶ中で、まったく動じることもなく眠っていました。彼は周囲の人々がどのような神を礼拝し、また助けを求めようが、ほとんど無関心でした。ところが、自分と天地創造の神との関係を説明しなければならなくなったときには、臆することなく堂々と語りました。必要ができたとき、証する機会があったときには、大胆にはっきりと、天地創造の神について語ったのです。

偶像礼拝者の中にいるとき、いちいち偶像礼拝者を責め立てるのが、正しい信仰のあり方なのではありません。天地創造の神の力を体験し、天地創造の神を知ったものが、偶像礼拝に陥ることに対しては、鋭い警告と叱責が与えられるのですが、まだ、天地創造の神を知らない人たちが、偶像礼拝をしているからと言って責めるのは、的外れなのです。私たちは、証の機会があったときは、堂々と語るべきですが、あえて、他の宗教を攻撃する必要はないのです。ただ、私たちの間に入り込もうとする偶像礼拝には、鋭い警戒の目を向けなければなりません。

Ⅲ.　ダニエル

ダニエルは 3 人の友人たち、シャデラク、メシャク、アベデネゴと共に、偶像礼拝を拒否した英雄です。彼らのように明白に偶像礼拝を強要されたならば、ヨナも同じように死を選んだことでしょう。ナアマンも死を選んだかもしれません。

ただ、あのように偶像礼拝を直接強要されなかったとき、ダニエルも 3 人の友人たちも、異邦人が支配する偶像礼拝の世界で、大いに尊敬を受ける立派な指導者として立てられていたのです。もしも彼らが、あっちに出かけてはお地蔵さんに手を置いて「悪霊追い出し」をし、こっちに出向いては鎮守の森で「悪霊を縛る」祈りをする、現代の「超霊的なクリ

スチャン」たちのような、挑戦的で戦闘的なことをやっていたとしたらどうでしょう。周囲の人々の信頼と尊敬を勝ち取って指導者になるなどということは、絶対にあり得ないことです。自分たちは天地創造の神だけを礼拝するという、毅然とした態度を保ちながら、周囲の人々の偶像礼拝と、それにまつわる様々な祭祀や行事には、寛容であったと考えなければ、ダニエル書の物語自体が成り立たないのです。

実際、捕囚となってバビロンやペルシャで生活をしていた何十万ものユダヤ人たちが、すべて、時と所をわきまえず、ギデオンがやったように偶像を破壊して歩いていたら、（師士記 6 章：25 節～32 節） 彼らはたちまち嫌われ憎まれる民族となり、エステル記に記録されているような民族の危機に、油を注ぐことになったに違いありません。ギデオンは、天地創造の神の助けを幾度も体験し、神を知っていたイスラエルの中から偶像を取り除こうとしたのです。

ただ、偶像礼拝民族に捕囚となっていたユダヤ人が、ともすれば誘惑に負け、偶像礼拝に陥りやすい傾向があったために、神は、あのような出来事を起こし、それを記録させることによって、偶像礼拝に毅然とした態度をとるように、教えてくださったのだとも考えられます。

私たち日本人は、民族として、天地創造の神の救いを体験していません。というよりも、明らかに天地創造の神の救いだと分かるような形での、助けも救いも体験していないのです。ですから、神が、明らかな助けと救いと自己啓示（自己紹介）をもってご自分を現してくださったイスラエル民族と、まったく天地創造の神のことを知らない日本民族を同等に考え、イスラエル民族に与えられた聖書の命令を、そのまま日本人に適用することは大きな、重大な誤りなのです。

そのような日本人の中で、天地創造の神を知ることができた数少ない人間として、私たちはいかに正しく生きるべきか、もっとしっかり聖書を読み、学び取り、実践していきたいものです。偶像を壊せ、悪霊を追い出せ、仏壇を焼け、神棚を棄てろと騒ぎ立てる愚かさはやめて、周囲の人々と平和に過ごしながら、いざというときには、毅然とした態度で、天と地をお造りになった神だけを礼拝することを、はっきりさせましょう。この神だけが私たちの礼拝を受けるにふさわしい方であり、この神だけが、私たちを救い、永遠の命を与えてくださる方だからです。

現在、日本のキリスト教の主流は、西欧で発展させられたキリスト教、つまり、キリスト教以外のすべての宗教を、偶像礼拝と断じて敵視するキリスト教です。そのようなキリスト教を受け入れている、クリスチャンたちの多くが知らないうちに陥っている、偶像礼

拝の罪があります。それは貪りという偶像礼拝です。パウロによると貪りが偶像礼拝なのです。神よりも金銭を愛することは、キリストも「マモン神」に仕えることとして厳しく戒めておられます。（コロサイ人への手紙 2 章 5 節、マタイの福音書 6 章 24 節）キリストがお用いになった「富」という言葉には、富の神という意味もあるのです。

いま、富める国の富めるクリスチャンたちの多くが、神を信じるとすべての面で祝福されると主張する、繁栄の福音なるものに迷い込んでいます。金銭的な、また物質的な豊かさを神の祝福と受け取って、その祝福を追求して止まないクリスチャンたちは、直ちにその貪りという偶像礼拝の罪を悔い改めるべきです。自分の教会を大きくすることに奔走している牧師も、荘厳な教会堂を立てようと走り回っている教会役員も、自分の中にある神の栄光を求めない上昇志向を、偶像礼拝と認めて、悔い改めるべきです。

他民族の偶像礼拝者を責めるのが、神の律法の主旨ではありませんでした。イスラエルの中の偶像礼拝を取り除くのが、目的だったのです。異邦人である日本民族の偶像礼拝を責めるのは、私たちに与えられた働きではありません。教会の中から偶像礼拝を取り除くことこそ、私たちに課せられた重要な働きなのです。